

聖書:列王記第二8章1～6節

説教:すべてを返してやりなさい

はじめに

私たちが学校で学ぶ歴史の教科書は、年代順に出来事が並べられていて、歴史はそんなふうに通年順に見るものだと思ってきました。ところが聖書はちょっと違います。列王記で言えば、確かに物事が起きた時間の順序に従っておおよそ書いてあるのですが、ところどころそうではないところがあると言われていて、まさにそれが今日のところです。なぜわかるかと言えば、4節に出来る若者ゲハジの事です。彼は、5章のところでナアマン將軍をだまして金品を横取りしたことがばれたことから、ツアラアトという病気になるてしまいエリシャのもとから追い出されていたのです。ところがここではまるで何もなかったかのように出てくる。それで、ここはナアマン事件が起きる前の出来事だということになります。

それはよいのですが、ではどうして順番を入れ換えたのかということになる。聖書は罪人を救うために書かれたものであるわけですから、当然、神の救いについて大切なことを教えるために、わざと順番を入れ替えて、この箇所の直前に書かれていたことと一緒に考えなさいということでしょう。両方一緒に見ることによってより深く神の救いがどんなものなのかわかるようになっていきます。そんな目で見てまいります。

1 シュネムの母親

1) 「主は生きておられます」

そこでまず今日の箇所から見ます。ここに登場する女性は、シュネムという町に住んでいた比較的裕福な家の女主人です。彼女は、エリシャを食事に招いて話を聞くうちに、この方はきっと神の聖なる方に違いないと見抜いて、一生懸命エリシャの世話をするようになります。すっかり恐縮したエリシャは、なにかお礼したいということになり、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱くようになる」と預言するのですが、女主人は最初まったく信じなかったのにもかかわらず一年後に息子が与えられ、大喜びします。ところがこの子どもが成長しておそらく小学生くらいになったとき事件が起きます。ある日、急に頭が割れるように痛み出しそのまま倒れて数時間後に母親の腕の中であっけなく息を引き取ってしまう。それでこの母親は、エリシャの元に走って行き、「主は生きておられ

ます。あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません」と訴え、これを聞いたエリシャは子どもが横たわっている部屋に入って主に祈ったところ、子どもが息を吹き返し、母親の手に戻っていた。そういうことがありました。

2) 飢饉を逃れて

1節は、そんなことがあつてからおそらく数年経ったときにエリシャが母親に語ったことばです。雨の季節になってもまったく雨が降らず、大飢饉が襲ってきます。それでエリシャは、「あなたは家族の者たちと一緒にどこか別のところに逃れて、しばらくそこで寄留しなさいと」告げ、結局七年間ペリシテ人の地に滞在することになりました。

3) 「すべてを返してやりなさい」

やがてイスラエルにも雨が降るようになり飢饉が去ったので、この家族はもとの家に戻ってきます。ところがその家に入ろうとすると、すでに誰かが住んでいて、まったく出て行く気配がない。畑も知らない間に他人の手に渡っていて、勝手に耕しているありさまです。いまならこういう場合、裁判所に訴えて立ち退きや損害賠償を請求することになるのですが、イスラエルでは、王が困りごとをさばく仕組みになっておりましたから、この女性は王に訴えに来たわけです。

そこで何が起きたかは書かれているとおりで、王が、エリシャがどんなことをしたのかを残らず聞かせて欲しいというので、ゲハジは自分も目撃して一番驚いた話をする。エリシャが死んだ子どもを生き返らせたという話を真っ先にしていた。ところがちょうどそこへ話している当の主人公が子どもを連れてやって来る。私たちもときどきこれと似たようなことを経験します。そんなとき、人は「偶然だ」とか「縁があったんだね」と言います。もちろん私たちは、そんな言い方はしないで、神の御支配によるものと考えます。

それはさておき、王は、ゲハジから死んだ子どもが生き返ったという話を聞いて、無理もないことですが、にわかには信じがたい。本当だろうかと首をひねっていたら、なんとそこへとうの本人が現れたので、何も知らないふりをして尋ねると、ゲハジが話したのとまったく同じ答えが返ってきた。これはもう疑いようがない。腰も抜かすほど驚い

た。おかげで、この女の訴えはトントン拍子に手続が進み、6節で王はこのように命令します。

「彼女のすべての物と、彼女がこの地を離れた日から今日までの畑の収穫のすべてを、返してやりなさい。」

さあ、ここまで読んで来て、皆さんはどんな結論を出すでしょうか。例えばこうでしょうか。この母親はエリシャを見て「この方は神の聖なる人に違いない」と見抜くほどのすばらしい信仰を持っていた。神はその信仰をご覧になってたくさんの祝福を与えてくださった。もちろんそれは間違いではないでしょう。でも果たしてそれだけなのか。

2 サマリアの母親

1) 「わが主、王よ。お救いください。」

では次に、今日の箇所直前にはなにが書かれていたのか。簡単に振り返ります。あるときアラムの王ベン・ハダドによってサマリアの町が包囲されたので、町の人々は堅く門を閉ざして城壁の中に閉じこもります。しかし日が経つうちに食糧が尽き、とうとうあるひとりの母親が自分の子どもを殺して鍋で煮て食べるという悲惨な事件が起きます。そこへ通りかかったイスラエルに向けて、母親が「わが主、王よ。お救いください」と叫んだことがきっかけになり物事が動き出します。神が不思議なみわざをなされて、アラムの兵士たちは大混乱に陥り逃げ去ってしまう。それでサマリアが救われた。そんな話でした。

今日の箇所とサマリアの町の事件、両方を比べてみてください。共通点はなんでしょう。すぐにおわかりのように、子どもを持った母親が出てくる。一方をサマリアの母親、もう一方をシュネムの母親と名前をつけて、二人の母親を比べてみましょう。

まずシュネムの母親から。子どもは一度死にましたが、エリシャの手で生き返らせてもらいました。また飢饉が襲って来たときは、エリシャのアドバイスがあって安全なところへ逃れることができ、飢饉が終わって帰ると、家はもちろん七年分の畑の収穫物も加えてすべて返してもらいました。

ではサマリアの母親はどうでしょう。アラムの軍隊が襲って来たとき安全なところへ逃れることはできず、町の中に閉じ込められたままです。そこで飢饉に苦しみ、とうとう子どもを殺さなければならなくなりました。結果としてはアラムの軍隊からは救われたかも知れませんが、死んだ子どもは帰ってきません。失ったものは戻ってこなかった。

シュネムの母親と比べると、その違いの大きさは際立っています。

2) 二人の母親を比べる

シュネムの母親とサマリアの母親。この二人は住む場所も違えば、環境は違ってはいても、同じ人間です。それなのに、神の救いはどうしてこうも違うのかと、皆さんは疑問に思わないでしょうか。それともこんな説明をするでしょうか。シュネムの母親は、エリシャを一目見て「神の聖なる人に違いない」と見抜くほどの信仰があった。神はその信仰に応じてくださった。それに対して、サマリアの母親は子どもを殺して食べるというひどい罪を犯した。だから違いがあるのは当然だ。もう少し極端な言い方をすれば、神の救いは、その人の信仰の度合いや、犯した罪によって違いがある。そんな説明でしょうか

3 救い

1) ぶどう園のたとえ

少し見方を変えて考えます。イエスが話されたたとえ話の中にこんな話があります。ぶどう園の主人は一日の賃金として一デナリを払う約束で労働者を雇います。ところが賃金を払う段になって、朝九時から働いた人も、夕方五時から働いた人もみな同じ賃金だったので、朝九時から働いた人は主人に文句を言う。「自分たちは朝から暑いのを我慢して働いたのに、同じ賃金とは不公平ではないのか。」ところが主人は「あなたは一デナリで働く約束したでしょう。それともあなたは私があんまり気前が良いので、ねたんでいるのですか。」(マタイ20章15節)

人間の尺度で見ると、主人がしていることは不公平に見えても、これが神の尺度だと言うのです。暑いのを我慢して働くのは確かにつらいけれど、しかし最後にいただく賃金、それは救いのことなわけですが、遅くから働いた人でも同じ救いをいただける。働いた時間だけに目を留めるなら差別にしか見えません。でも救いというところに目を留めるなら、みな公平なのです。

2) 神の公平

このことは二人の母親のことにもそのままあてはまります。シュネムの母親は、このたとえで言えば、死んだ子どもは生き返り、飢饉にも遭わずに失った者も取り返したのですから、苦労はそれなりにあったのにしても、サマリアの母親の目には、夕方五時からたった一時間しか働いていない

人、苦勞の少ない人にしか見えないでしょう。一方、サマリアの母親は正反対です。朝の明け方からほこりまみれになりながら働き続けたようなもので、飢饉の苦しみ遭い、失った子どもも財産も帰って来ませんでした。それでも夕方には救いにあずかります。

どうしてこのような違いがあるのかは私もわかりません。一つだけ言えるのは、あの人この人の生活や境遇を比べて、その違いをどうこう言うのではなく、それぞれの置かれたところを歩みなさいと神は言うのです。置かれた道は違っても目指すゴールは同じ。私たちは救いという同じゴールを目指しながらそれぞれの道を歩みます。

その救いの日、何が起きるでしょう。王はシュネムの母親に言いました。6節後半。「彼女のすべての物と、彼女がこの地を離れた日から今日までの畑の収穫のすべてを、返してやりなさい。」

シュネムの母親が死んだ子どもを取り返すことができたのならば、サマリアの母親にも同じことが起きるはずですが、救いの日、死んだ息子を取り戻します。それが神の時間なのです。

イエス・キリストがしてくださったことは完全です。遅すぎたと言うことはありません。何かが起こるならいつも、ちょうど良い時間で、期待したことが起きなくても、それは神が定めたちょうど良いとき与えられていく。そのことを信じて歩んでまいります。